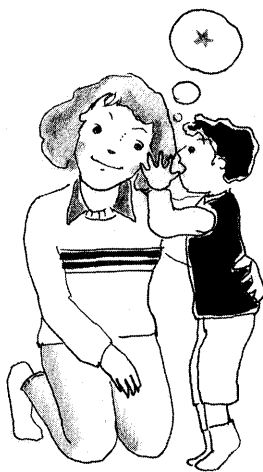


ジョン・バーニングガムの魅力 2

「バーニングガムのちいさいえほん」

を中心として

高原 典子



○絵と文

「バーニングガムのちいさいえほん」の主人公は「ぼく」。その「ぼく」をめぐる、『ゆき』『もうふ』『がっこう』『いぬ』『とだな』『ともだち』『うさぎ』『あかちゃん』など八冊のシリーズがあります。どの一冊にも、読み手に近いリアルな子どもの生活と心情がこめられていますので、幼い読者にとっては、とりわけ親しみやすい絵本でしょう。

こうした小品では、日常生活に題材を拾ったものであればあるほど、主人公のすること、感じることに、どのように起承転結をつけ、どんなオチをつけるかで作品の価値が決まってしまうですが、このシリーズはどうで

しょうか。

『ゆき』をテキストにして、まず文の方だけみていきます。(あとで絵から読みとるものと対応させるため、便宜的に場面に番号を付けます。)

- ① あるひ、雪がふった
- ② おあかさんと大きな雪の玉をころがして
- ③ 雪だるまをこさえた
- ④ ぼくは そりにすわって
- ⑤ おかあさんが ひっぱってくれたよ
- ⑥ でも おっこっちゃった
- ⑦ てぶくろをなくして 寒くなって
- ⑧ ふたりとも うちへはいったんだ
- ⑨ あしたも 雪がなくなりませんように

こうして文だけ読むと、なんとなくサラッと流れてしまい、単なる短文としてしか感じられませんが、画面と対応させてよんでいくと、絵の語るみずみずしいことば

を同時にキャッチすることによって、絵と文との織りなす立体的な詩の世界が広がり始めるのです。

では次に、絵に重きを置いて、読み解いていきます。

①雪がふってうれしいので、ぼくは両手を広げて雪をむかえた。でも、おかあさんはちよっぴり寒そうにポケットに手をつっこんでいる。雪はどんどんふってきて、ぼくとおかあさんのまわりに積もっていく。

でも、これからおかあさんと雪で遊ぶんだもの。ちっとも寒くないよ。

②おかあさんもぼくも足をふんばって、雪の玉をころがしていく。ころがせばころがすほど、雪の玉は大きくなるし、ぼくたちの息はずんで、ほっぺたも赤くなる。

楽しいよ。

③ころがした玉でつくった雪だるま。

ほら、みて！　りっぱな雪だるまでしよう。

ぼくよりずっと大きいんだよ。

おかあさんと一緒につくったから。

④今度はそりすべり。

ぼくは安心して　そりにすわった。

おかあさんがおさえてくれるから、ちっともこわくないよ。

⑤おかあさんがそりを引っぱってくれた。

おかあさんの足あとの上をそりがすべっていく。

雪はもうふってない。静かに夕やけが広がっていく。

⑥坂道だったんだ。

そりはおかあさんを通りこして、一気に坂をすべりおろし、ぼくはそりから落っこちた。

おかあさんが心配そうにかけて来る。

⑦そりから落ちて、こわかったのなんのって。

手ぶくろもなくしちやったし、ぼくは急に泣きたくなつたから大声で泣いた。

ぼくの泣き声は、冷たくて透明な空気をふるわせ、白い雪の原にすいこまれていく。

⑧家にもどったら、おかあさんがすぐにあつたかい飲みものをつくってくれた。飲んでるうちに、からだ中がぼかぼかしてきた。

ぼくはとつてもしあわせな気持ちになって、そばにいるねこの頭をなでた。

ねこも気持ちよさそう……。

⑨きょうはほんとに楽しかった。

ベッドに入ったら、いい気持ちですぐに眠っちゃった。

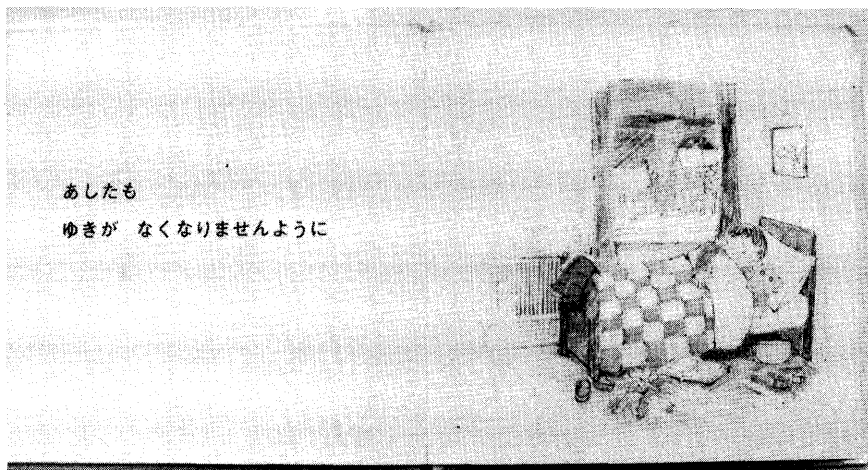
でもお月さまはちゃんと起きていて、窓からそつとぼくをのぞいたり、雪の街を照らしている。

夢の中でぼくは思った。

「あしたもまた、雪で遊びたいなあ。」

これは文章を下敷にして、私が絵から読みとったものです。絵によって喚起された想像力を表現する手段としては、谷川俊太郎の訳文に対応するような「言語」を用いました。文を耳から聞くこと（あるいは読むこと）により、絵から与えられるイメージを表現するときには、おのずと類似した方法になるからです。それ以前に、ある文章が条件として与えられたなかで絵を見ると、それがない場合に比べ、想像力もなんらかの方向性を持つこととなります。文によって規制を受ける場合もあります。それが適切な手がかりや道しるべになることも多くあるのです。この『ゆき』の場合は明らかに後者でしょう。文章があることによって、読み手はより豊かに絵からのイメージを喚起させることができるのです。

もし文がなかったら、最後の場面（図版①）など、絵からどんなことを想像するでしょうか。雪の中でおかあ



あしたも

ゆきが なくなりませんように

▲ 図版① 『ゆき』（富山房）より

さんと遊び、楽しくて少しこわいこともあった一日。

「ぼく」の安らかな寝顔からは、楽しい雪の日だったことは読みとれますが、「明日」のことで読めません。

ところがたったひとこと、「あしたもゆきがなくなりませんように」（原書が絶版になっているため、原文に当たることができず残念なのですが。）という文章が提示されることによって、「ぼく」にとって「今日」の楽しさはずっしりと重みを増し、「明日」の楽しみへと紙面を超えて広がっていきます。つまり絵本の中に描かれていない明日にまで読み手を連れていってくれるのです。それは今日と同じように楽しい日にちがいありません。このように現実を昇華させ、読み手の想像力に魔法をかけることばこそ、詩のエッセンスといえるでしょう。この最後の一文は、主人公の、また作者の願いでもあります。子どもの「至福のとき」をみごとに捉えた瞬間でもあります。こうして日常的レベルの描写が詩的次元を持つ過程は、「ぼく」というひとりの子どもが「子どもなるもの」として普遍化されるそれに他なりません。

ですから、この絵本のみならず、このシリーズは、絵と文とが相剌的に両者の効果を高め合い、イメージの質と量とを豊かにすることによって、小品ながらみごとに「読ませる」絵本となった好例として挙げることができます。そこに訳者の力が大きく働いていることはいうまでもありません。

○しあわせな顔

「ぼく」は丸い顔をしています。でも丸い顔、豊かな頬を持っているのは「ぼく」だけではなく、友だちのアーサーも赤ちゃんも、あるいはガンピーさんやシャーリーも皆そうなのです。

矢内原伊作は『顔について』で「裸の顔というものはない。初めから裸であるからではない。脱ぐことのできない衣裳を初めからまとっているからであり、むしろ顔そのものが衣裳だからである。……仮面を脱げ、と人はいうが、仮面を脱ぐことはただちに別の仮面をつけることにほかならず、素面というものがない以上、われわれ

の努めるべきは仮面を脱ぐことではなく、よりよい仮面をつけることであろう。」と書いています。また宇佐見英治は『芸術家の眼』の「人間の顔」の章で、「……人間の顔は部分でも全体でもない。それぞれの顔はどこから漂着した種字しゅじ。本来体軀しんくとかかわりのないものだ。顔は内面のない外面、外面のない内面である。」と述べています。

つまり、人間の顔というものは、ベルソナとして、衣服と同様に、その人の外的な役割を果たすものですが、まったく逆に心のおもざしであるということなのです。顔はちょうど家の玄関のように外に對する構えであると同時に、内部をありありと見せるものだけに、画家にとっても鑑賞者にとつてもたいへん興味深く、象徴性の高いものと考えられるわけです。

たとえばエドヴァルト・ムンクの『叫び』というリトグラフには、手で耳をおおい、何か叫んでいる人の頬のこけた顔が描かれています。これはムンク自身が「青黒い峡湾の上に、血のように赤く、炎のように赤い雲が

たれこめていた。ひとりで不安に震えていた私は、自然の廣大無辺の叫びに気がついた」と製作動機を述べているように、不安な内面を表現する顔です。その不安は、画家の個人的な生活のみならず、世紀末という時代そのもの、そして当時、規制の強かった北歐社會に對するものといわれています。

また、かつて彫刻家でもあったアメデオ・モディリアーニの描いた肖像画は、特に後期の特色とし、卵型の顔と細長い首を持っており、その簡潔で優美な曲線は、顔の表情と相俟って、モデルの内面の憂愁、緊張感、あるいは意志などの精神性を表すものとも捉えられます。こうした肖像画以上に、絵本の主人公の顔は、画家の意図がこめられているものです。ですからバーニンガム描くところの「丸い顔」は、彼の描きたい子ども像、人物像の象徴とも捉えられるわけです。たとえば「ぼく」には、大きな毛布がなくなれば、一緒に探しまわってくれる両親がいます。おかあさんは、雪の日に一緒に遊んでくれ、戸棚の中のものを全部出して遊ぶのも認めて

くれる（もちろん後片づけもさせられますが）ような良き理解者です。そしてときどきけんかをするけれど仲良しの友だち、大きくなったら一緒に遊びたい赤ちゃん、かわいがっているうさぎもいます。つまり「ぼく」は愛してくれる人と自ら愛するものとに恵まれ、充分に心が満ち足りているのです。この例のように「丸い顔」に、私どもは古来から完璧な形として尊ばれた望月さながら、円満でバランスのとれた状態、精神的肉体的に満ち足りた「幸福」を読みとります。針金のようにやせ細った「スーブぎらいのカスパール」（『もじゃもじゃペーター』所収）の顔には、だれも「しあわせ」を感じません。彼の顔は、現実を拒否し続ける悲愴感にあふれているのですから。読み手ほど主人公の幸・不幸に敏感で、それを分かち合う存在はありません。ですから主人公がしあわせなとき、読み手もこのうえないしあわせを覚えるのです。



▲ 図版② 『あかちゃん』（富山房）より

○存在のひとしさ
とここで、バーニンガムの絵本には、もう一つ面白い特色が挙げられます。たとえば『あかちゃん』（図版②）という絵本に顕著に見られるように、赤ちゃんは

ちっとも小さくはなく、「ぼく」とほぼ同じ大きさで描かれています。つまり赤ちゃんは「ぼく」にとつて、おかあさんを占領する、ときにうとましい弟妹であることもあるけれど、良きにつけ悪しきにつけ、大きな存在であることを物語るものでしょう。それは人間だけではありません。ガルピーさんの舟に乗った小動物も、ちいさいえほんシリーズの「うさぎ」などもずっとしりと大きく描かれています。これは、動物も赤ちゃんも客観的には小さな存在かもしれないけれど、存在の重さという意味では少しも変わらない、どの存在も同じように大切なのだというバーニンガムの主張に思えます。しあわせな「ぼく」のつくりだす詩的な世界に触れるたびに、バーニンガムの愛に満ちた静かな祈りを感じないではいられません。

(小田原女子短期大学)

掲出図書

○ジョン・バーニンガム作／谷川俊太郎訳

バーニンガムのちいさいえほん

第1集『ゆき』『もうふ』『がっこう』『いぬ』

第2集『とだな』『ともだち』『うさぎ』『あかちゃん』

(富山房)

○ジョン・バーニンガム作／みつよしなつや訳

『ガンピーさんのふなあそび』 (ほるぶ出版)

○ジョン・バーニンガム作／辺見まसानお訳

『なみにぎをつけて、シャリー』 (ほるぶ出版)

○ハインリッヒ・ホフマン作／佐々木田鶴子訳

『もじゃもじゃベーター』 (ほるぶ出版)

引用文献

○矢内原伊作著『顔について』 (みすず書房)

○宇佐見英治著『芸術家の眼』 (筑摩書房)